

同一情報に基づく文章表現の印象・ 評価の差異について

蓮 見 陽 子

[キーワード：① 読後感；② 計量国語学；③ 同一情報；④ 印象・評価；
⑤ 古典翻訳文]

1. 調査の目的

文章は、新聞記事の文章、論説文の文章、小説の文章などのように、文章の様式や、書式的な形態によって、いくつかのスタイルに分類される。この時、読み手の側は、ほとんどの場合、文章の内容を区別して、いくつかのジャンルに分類する。また、文の種類や、文の組み立て方など、その構造上の特徴によっても、ほぼ規則的に幾つかのスタイルに分類することができる。つまり、書き手は、その用途によって、文章を書き分けている、といえる。

一方で、〈文は人なり〉ということが、しばしばいわれる。人の髪型や、服装にもそれぞれ個人的なスタイルがあるように、文章にもいくつかの個人的なスタイルがあるのではないかと考える説である。例えば、ある作家の文章について、「この文章は、いかにも女らしい文章である」ということが言われたりする。また、小説の一部分を読むだけで、その作者を類

推できる場合もある。これらのことは、文章の様式が同一の場合にも、それぞれの文章には、ある独自の個別的なスタイルが存在していることを示すのではないかと、と思われる。

これに関連して、波多野 (1958) に、12人の作家の14の文章について、性別と作者名とを推定させる、という実験がある。この結果、最高で88.5%、最低で11.5%と幅はあるものの、全体の平均で約60%の性別の的中率があることが分かる。このことから、文章の享受者である読み手と、読み手に提供された文章との間には、何らかの共通の意識が、同時に存在しているのではないかと、ということが指摘できる。つまり、読み手と書き手の間に、密接な相関関係を見出すことができるのである。

そこで、蓮見 (1991) では、文章そのものについて、外延的に分析していくことで、文章を客観的、数量的に特徴づけてきたが、今度は、文章について、内包的に分析していくことで、読み手が文章を読んで感じる主観的な印象を数量的に捉えることを試みた。ここでは、先に計量的な手法を用いて分析してきた文章を用いて、読み手の主観的な読後感を取り出すことを目的とした。つまり、文章を読んで感じる主観的な印象を、文章の構造上にみられる客観的な特徴で示そうとしたのである。

2. 調査の方法

ここでは、同一の内容を伝えている複数の文章について、比較することにした。それは、文章が伝達する内容が一定のものであれば、その内容によって、読み手の印象が左右されにくくなる、と考えられるからである。つまり、文章の内容が同一であれば、文章の内容上による印象の差異がある程度制限され、もっぱら、言語表現上の読み手の主観的な印象を取り出

すことができるのではないかと考えたからである。

この調査では、調査の目的のために人為的操作が加えられた文章ではなく、広く一般に提供されている作品の中から文章を選定して、比較を行なった。それは、被験者の反応を重視したためであり、人為的操作を加えた文章を用いた場合よりも、被験者の反応が散らばるであろう、と判断したからである。サンプルとした文章には、先の分析で、文章を特徴づける要因として、名詞の多少、漢字含有率の多少、文の長短、などの項目が導かれた、古典文学作品からの翻訳文（『源氏物語・第16帖「関屋』』）を取り上げた。

文章の比較には、21種類の訳文の中から、文章の印象や、いわゆる、文章の分かりやすさを決める要因となる、と考えられている項目に適合する作品を選び、その適当な箇所を取り上げた。ここでは、林（1959）の調査を参考にし、同じ内容を表現した2つの文章を被験者に与え、その文章を読んで生じた印象を記入する、という方法をとった。そのため、対照的な2つの文章が呈示され、それを比較しての印象、という限られた印象を調査することになった。

そこで、同じ内容の設問を複数用意するなどの工夫を施した。アンケートには、4組の文章を用意し、4組の文章のすべてにわたって、10項目についての印象を聞くことにした。これらの10項目は、それぞれ、文章についての論理的な評価、感性的な評価、規模的な評価、の3つに分類することができる。ここでは、その10項目を

- 1 長いと感じる文章
- 2 古風な感じがする文章
- 3 上品だと感じる文章
- 4 読みにくいとを感じる文章

- 5 わかりやすい文章
- 6 固いと感じる文章
- 7 温かいと感じる文章
- 8 上手だと思ふ文章
- 9 詳しいと思ふ文章
- 10 男らしいと思ふ文章

の順番に並べた。

ここでは、呈示したそれぞれの文章の見やすさ (Legibility) を一定にするために、いずれの文章も 1 行 20 文字の横書きで書式を統一した。なお、それぞれの文章の字体や仮名遣いはすべて原典に従ったが、振り仮名は省略した。アンケートには、本稿末尾 [資料] のアンケート用紙を用いた。

この調査は、「文章表現に関するアンケート」と題して、1992 年 3 月、東京都立の高等学校 2 年生 (男子 107 名・女子 102 名) に対して行なった。文章から受ける印象に関するアンケートであるため、決まった回答はない、ということを強調し、各人が感じたままの自然な印象を記入するように、口頭で説明した。なお、5 クラスに渡って調査したが、アンケートには、それぞれ約 25 分を要した。

3. 調査の結果

ここでは、[資料] のアンケート用紙を用いて調査した結果について、設問ごとにみていこう。なお、それぞれの文章にみられる客観的な、あるいは、計量的な特徴は、[表 1] のようにまとめられる。

3.1 和語的な文章と漢語的な文章

設問1では、和語的な文章である田辺訳と、漢語的な文章である宮田訳について、比較することを目的とした。

田辺聖子訳

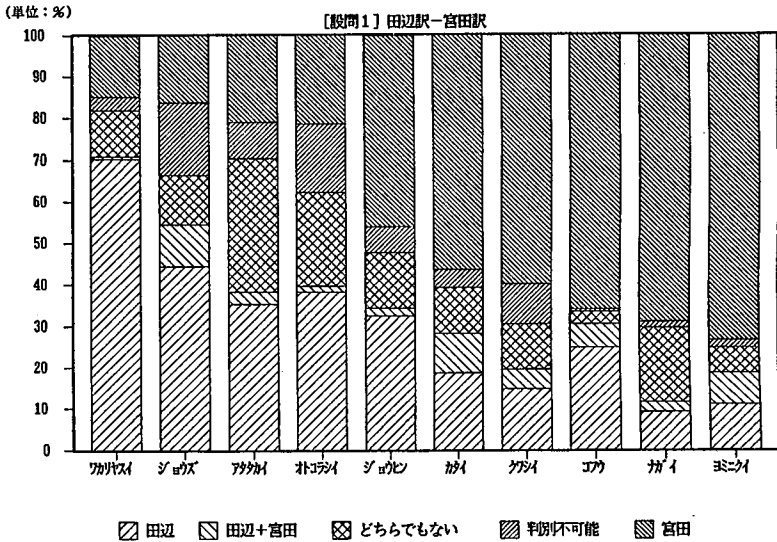
源氏の君が須磨へ流されていったことをはるかに聞いて、空蟬は人知れずいたましく悲しく思っていた。しかしその想いを源氏に伝えるよすがもなく、筑波山を吹く風にたよりをことづけたいと思っても、それも今さら、人妻の身で——と憚られ、まったく消息も絶えた日を重ねたのだった。

宮田和一郎訳

女は源氏君が須磨に謫居して居られる事をも常陸から遙かに聞いて、人知れず思ひやり申しあげぬでもなかつたけれども、その意中をお傳へ申しあげる便宜さへないので、なるほど筑波山を越えて京に行き交ふ人も稀にはあるのだが、それに託するのも不安な気がして、聊かの人傳の消息さへなくて久しい年月が過ぎてしまった。

この2つの訳文を比較した読み手の反応は、[図 1] のようになった。ここで、特に目立つのが、宮田訳の読みにくさである。また、宮田訳の文章は、長く古風で固い詳しい文章である、と感じられていることがわかる。それとは逆に、田辺訳の文章は、かなり、分かりやすいと受け止められており、短くて新しい上手な文章だと感じていることがわかる。

ここで、それぞれの訳文の計量的な分析（[表 1] を参照）をみてみると、宮田訳は、田辺訳に比べて、1文の長さが非常に長くなっており、漢字含有率も高くなっている。そして、執筆年代にも40年の開きがあることがわかる。また、実際の使用語彙についてみてみると、田辺訳では、「想い」、



【図 1】

「よすが」と訳している箇所を宮田訳の方では、「意中」、「便宜」と訳しており、宮田訳では、田辺訳に較べて、漢語の使用が多く、また、現代では、あまり使用しないような語彙が、比較的多く含まれていることが指摘できる。

そして、田辺訳では、「空蟬は」という主語が、述語のすぐ近くに置かれていたり、[想いを「源氏に」伝える]、というように、連用修飾が使われていたり、構文的にも宮田訳とは大きな違いがみられる。

この結果、上手だ、という文章の感性的な評価を除けば、読み手の主観的な印象は、作品の客観的な分析結果と、ほぼ一致することが指摘できる。

3.2 長い文章と短い文章

設問2では、長い文章である谷崎訳と、短い文章である田辺訳とを比較

[表 1] 文章の計量的な分析結果

	<1A>	<1B>	<2A>	<2B>	<3A>	<3B>	<4A>	<4B>
	田辺	宮田	谷崎	田辺	島津	おの	舟橋	今泉
成立年	1974	1934	1939	1974	1939	1979	1961	1974
1文の文字数 (%)	64.50	146.00	234.00	52.17	86.00	68.00	86.50	61.00
漢字含有率	25.58	31.51	37.18	29.71	31.10	14.34	24.28	33.33
名詞 (%)	25.00	24.36	24.81	29.41	21.57	22.63	25.26	19.44
代名詞 (%)	1.56	1.26		0.59	0.49	0.73	2.11	
固有名詞 (%)	7.81	7.69	4.51	7.06	3.43	2.92	6.32	11.11
動詞 (%)	18.75	17.95	21.05	18.24	22.06	18.98	17.89	22.22
形容詞 (%)	4.69	6.41	2.26	1.76	2.94	2.92		
副詞 (%)	4.69	3.85	1.50	1.18	2.94	4.38	4.21	
助詞 (%)	34.38	39.75	37.59	36.47	35.78	33.58	31.58	30.56
助動詞 (%)	14.06	5.13	6.77	11.18	6.86	13.14	17.89	19.44
接続詞 (%)	1.56	1.28	0.75		0.49			
連体詞 (%)	1.56	1.28	0.75		4.90	2.92	2.11	5.56
その他 (%)		1.28	4.51	1.76	2.45	1.46	1.05	2.78

することを目的とした。

谷崎潤一郎訳

京から出向いて来た紀伊守など云ふ悴たちや、その外迎への人々が、殿が御参詣にお越しになる由を告げたので、では道中が騒がしいであらうと、夜の明け方から急いだのであつたが、數多の女車をつとけて、仰々しく練つて來るので、直きに日が高く上つて來て、打出の濱を通る頃には、もう栗田山をお越えになつたと觸れながら、前驅の人々が路を塞いで入り込んで來る有様に、皆々關山で乗物を下りて、此處彼

處の杉の下蔭に車を引き入れ、牛を外し轅をおろして、木がくれに畏りつゝお通りをお拝み申し上げる。

田辺聖子訳

京からは常陸の介の子で、紀伊の守などといった者たちが、迎えに来ていたが、

「源氏の君が今日、石山寺にお詣りに来られるそうですよ。偶然ぶつかってしまって」

と知らせたので一行は混雑を恐れてまだ明け方に宿所を出た。

かなり急いだつもりだが、一行は女車が多く、道いっぱいになってわらわらと進むので思いのほか手間取って、日が高くなってしまった。

打出の浜へ来かかった頃、

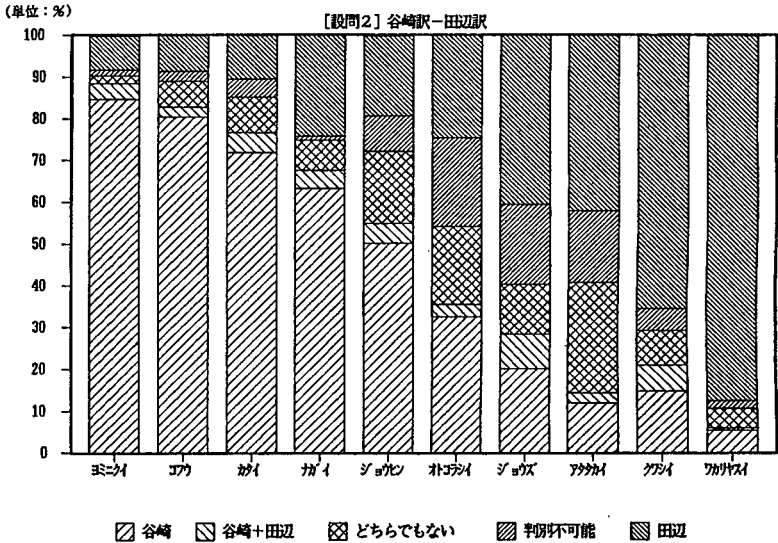
「殿は粟田山を越えられた」

ということで、源氏の前駆の者が道もいっぱいに立てこんでたいへんなさわざである。これでは通るわけにいかない。

常陸の介の一行は逢坂の関山で皆おりて、源氏の行列に道を譲り、やり過ごすことにした。ここかしこの杉の下に、牛を外した車を据え、木隠れに畏まって待つのであった。

この結果は、[図 2] のようになった。ここでは、田辺訳の文章のわかりやすさが際立っている。また、田辺訳を詳しい文章である、と感じている割合もかなり高く、温かい、上手だ、と感じていることがわかる。それに較べると、谷崎訳は、非常に読みにくく、古くて固くて長い文章だと感じられていることがわかる。

計量的にみても、谷崎訳は、1文の長さが極めて長く、漢字含有率も高い。そして、構文的にも谷崎訳では、1文になっているこの部分が、田辺訳では6つの文で構成されており、かなりの違いがみられることがわかる。



【図 2】

田辺訳では、会話文を用いたり、段落分けなどが行なわれ、「源氏の君が」、「一行は」、「殿は」などのように、随所に主語が補われているのに対し、谷崎訳の方は、接続助詞を多用し、主語も省略し、文の始めから終わりまでを、一息に読み流すような「流麗な」文章で構成されている。

ここでも、やはり、読み手の主観的な印象と、作品にみられる計量的な特徴との間には、何か、共通するものがあるのではないかとみることができる。

3.3 漢字表記の文章と仮名表記の文章

設問3では、訳文の表記が、漢字主体である島津訳と、仮名が主体となっているおの訳の訳文とを比較した。

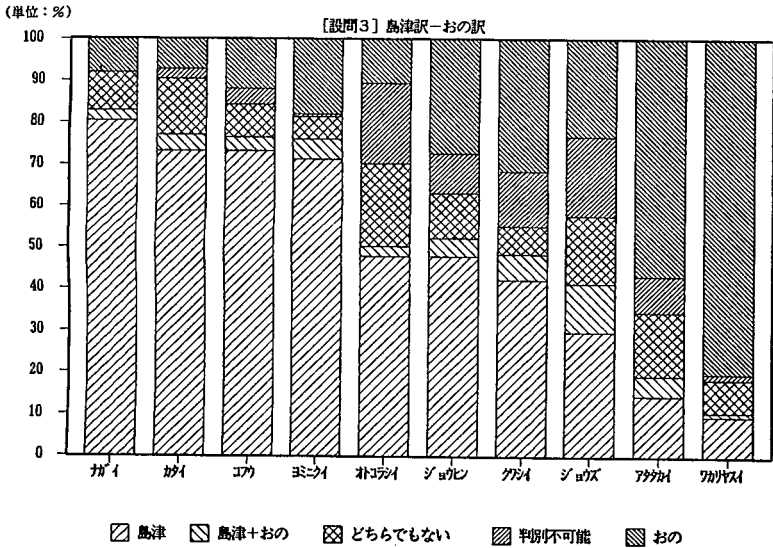
島津久基訳

かうしてゐる中に女の夫の常陸介は老衰の極であらうか、絶えず病み
つづけて、心細く感じたので、子息達に唯この女君の事だけを言ひ残
して、「萬事は唯この君の御心通りにして、自分の在生中に變らずお
仕へせよ」とばかり始終口ぐせに言つて居た。女君は、薄倅な前世か
らの因縁によつて、この夫にまで先立たれ、更にこの先何んな風に落
ちぶれさまよふのであらうかと、思ひ歎いてをられる、その様子を見
るにつけて、常陸介は、壽命といふものがあることだから、惜しみ留
めようにも方法がない。が、何うかしてこの女の御ために魂魄をこの
世に遣して置く事が出来ればよいに。我が子達の下簡もよく分らない
事だからと、氣がかりでもあり悲しくもある事と言ひもし思ひもして
居たが、壽命は思ふ儘には引き留める事の出来ぬもので、遂に亡くな
つてしまつた。

おのりきぞう訳

こうしているうち ひたちのすけは 病気がちで 心細かったので、
子どもに 妻のことを くれぐれも 言いおきます。
「すべて あの人のお心にまかせて、變らずに 仕えなさい。」
と、明けくれ 言っていました。女も、じぶんは つらい宿世で、こ
の上 この夫にまで死なれたら、どうして生きていけようか と、嘆
いています。男は、そうした 女の姿を見て、人の命は限りのあるも
ので 惜しんでも とめようがない、なんとか この人のために せ
めて 残しておく 魂でもあればなあ、子どもの心もわからないのに、
と、心配で 悲しくも思うのですが、心で とめるわけにもいかず
なくなりました。

この結果は、[図 3] に示したが、これによれば、おの訳の文章のわかり



【図 3】

やすさ、温かさが目立つ。一方、島津訳は、長い、古い、固い、読みにくい、という印象が、強く感じられていることがわかる。

ここで、おの訳は、ほとんどが仮名で書かれているため、漢字含有率が著しく低く、漢語の使用率も低い。また、おの訳は、分かち書きされている、ということも大きな特徴である。一方、島津訳は、おの訳の「すべて」、「明けくれ」などの訳語に対して、「萬事」、「始終」などがあてられ、専ら漢語が使用されている。また、おの訳では、「子ども」、「つらい」、「魂」、「心」などのような平易な訳語について、島津訳では、「子息達」、「薄倅」、「魂魄」、「了簡」などのような、現代語では、ほとんど使用されることがない、と思われる語彙が、多く含まれている。

ここでは、文章の固さや温かさのような、文章の感性的な評価が、かなり強く捉えられており、その印象と、作品にみられる漢字含有率、あるいは

は、漢語の使用率との関係が指摘できる。また、文章のわかりやすさや、読みにくさのような、文章の論理性に関する評価や、文の長さのような、文章の大きさに関する規模的な評価には、やはり、作品にみられる客観的、数量的な特徴と、読み手の印象との間に、何らかの関連のあることが指摘できる。

3.4 文学的な文章と注釈的な文章

設問4では、読者に読まれることを想定し、かなりの補いが施され、訳文自体が文学性の高い作品である舟橋詠と、注釈的な立場から、直訳的、要約的に、簡潔に訳された今泉詠とを比較した。

舟橋聖一詠

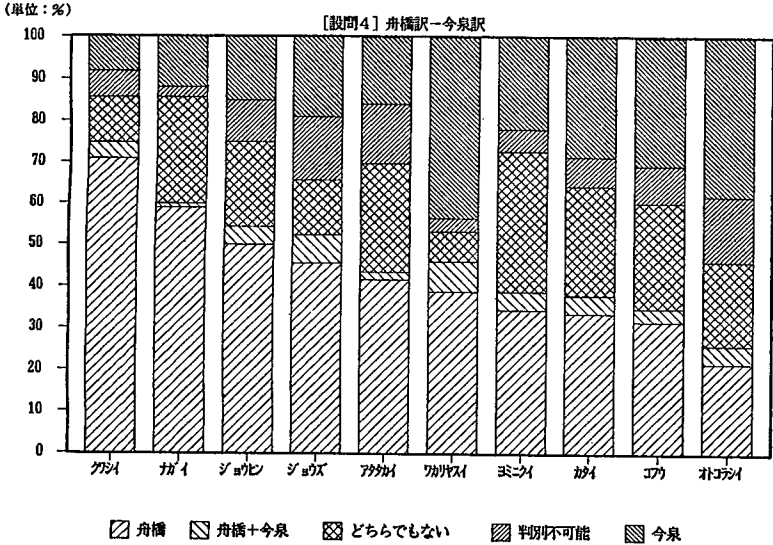
以前、伊豫介といった老人のことを、読者は、まだ記憶にとどめておられるだろうか。あれはいつだったろう……そう、たしか桐壺院がお崩れになった、翌年のことだったと思うが、任代わりして常陸介となった彼は、はるばる赴任していったのであの帚木、——目に見えて、ふと消えゆくにも似た女——その名を空蟬と呼んだ人も、夫にしたがって、常陸へ下っていったのだった。

今泉忠義詠

あの伊予の介といった男は、桐壺の院がお隠れになつた翌年、常陸の介になつて任国に下つたので、その空蟬も連れて行かれたのだった。

この結果は、[図4]になるが、この設問は、有意差検定の結果、ほぼ半分の項目についてしか、差異がみられないことがわかった。また、差のある項目でも、舟橋詠の方が今泉詠よりも、詳しくて長い、ということ以外には、明らかな違いを捉えることはできなかった。

この2作品は、計量的にみると、漢字含有率と名詞の使用率に違いがみ



[図 4]

られるのを除けば、先の3組ほど際立った差はないといえる。また、執筆年代も比較的近く、使用語彙や構文の難易にもあまり大きな違いはみられない。

しかし、同じ1文からの訳文であるが、その量に、大きな違いがみられる。また、その翻訳態度に、大きな違いがみられる。つまり、今泉訳は、名詞に占める固有名詞の割合が、かなり高く、基本的な文の構成要素のみで、文が作られた逐語訳になっている点で、舟橋訳とは大きく異なっているのである。

このような質的に全く異なる訳文間で比較した場合には、その印象・評価について、2つの訳文の間には際立った差はみられないことがわかる。

ここで、以上みてきた結果について、文章についての論理的な評価、感性的な評価、規模的な評価の3点にわけて、まとめてみよう。

3.5 文章の論理的な評価—文章の読みにくさとわかりやすさ

文章の論理性についての評価は、その作品の客観的な特徴によるところが大きい、といえる。というのも、それぞれ読みにくさ、わかりやすさ、といったものは、あくまでも読み手の主観に過ぎないが、文章の構造に基づく特徴との関連が指摘できるのである。

ここで、読みにくいと判断された文章は、いずれも他方の文章よりも、文が長く、成立の古い作品が挙げられていることがわかる。特に、文章が長い、と感じた設問2や、設問1の文章で、読みにくいと感じる割合が高くなっている。また、この2組の文章のうち、長いと感じる文章は、他方の文章が、複数の文に分けて表現しているのに対し、接続助詞を使用して1つの文で表現している、という点で共通している。また、構文的にも、他方の文章が、述語の近くに主語を置いたり、挿入部分に鍵括弧を用いるなどの工夫を施した簡潔な構文で表現しているのに対し、読みにくいと感じられた文章の構文は、かなり、複雑なものになっていることが指摘できる。

それを逆にしたものが、わかりやすい文章である。つまり、文が短く、比較的新しい時代にかかれた文章をさす。そして、使用語彙を現代語として相応しいものにし、構文的にも様々な工夫が施されている文章を、読み手はわかりやすい、と感じている。また、わかりやすい、と判断された文章は、計量的にみると、共通して他方の文章に比べて、名詞の使用率が高くなっている。

3.6 文章の感性的な評価—文章の古風さ・上品さ・固さ・温かさ・上手さ・男らしさ

文章の感性的な評価については、比較的、個人差が現われやすい、と考えられる。これらの項目には、それぞれ有意差はみられるものの、文章の論理的な評価や規模的な評価に較べて、2つの文章の間にあまり大きな差はみられない。これは、個人による感じ方の違いを示したものではないか、と思われる。

ここで、文章の古風さ・上品さ・固さについては、ほぼ似たような結果となっている。主観的に、読み手がそのように感じた文章を計量的に分析してみると、いずれも、文が長く、執筆年代が古く、漢字含有率の高い作品となっている。また、現代的とは思えないような単語や、漢語的表現の多用された文章、そして、古典的な仮名遣いや文字で表記された文章に、古風・上品・固いなどの印象を比較的強く持たれている、ということがわかる。

一方、文章の温かさ・上手さは、その逆のようである。比較的文が短く、新しい時期の訳文で、漢字含有率が低く、和語の使用が多い文章に、温かい・上手などの印象が持たれている。

ここで、最も多く、温かいという印象が感じられた文章は、設問3のおの訳であるが、この文章は、表記のほとんどが仮名であること、意味の切れ目で分かち書きをしていること、など、他の作品にはみられない大きな特徴を持っている文章である。逆に、温かい、という印象の最も低い作品である設問2の谷崎訳は、最も漢字含有率が高く、読点は使われているものの、文頭から文末まで、一気に読み流すような、かなり、長い文になっていることが指摘できる。このように、文章の計量的な結果のみならず、

構文的な構造も、印象に大きな影響を与えていることがわかる。

また、上手だ、とみなされた割合が最も高い設問4の舟橋訳は、原文を忠実に現代語訳した、いわゆる、逐語直訳になっている今泉訳に比べると、かなり、自由な表現になっている。舟橋訳の文章は、読み手と向かいあって、読み手に語りかける口調で文章が展開され、また、構文的な面でも、述語のすぐ近くに主語が置かれる、などの工夫が施された、原文にかなりの装飾が加わった訳文となっていることが指摘できる。同じように、設問1と設問2の田辺訳の文章も、他方では1文で表現されている場面を、複数の文に区切ったり、会話文を用いるなどして、人物関係を明確にしたり、構文的にも、原文を反映させながらも、その原文に、かなりの工夫を施した訳文になっている、といえる。

文章の男らしさについては、どちらかといえば男らしい、と判断された文章は、いずれも、他の文章に比べて、動詞の使用率の割合が高くなっている、という点のみで、あまり明確な特徴は導き出せなかった。ここでは、設問3の島津訳を男らしい、と感じた印象が最も強かったが、4つの設問のうち、その半分については有意差が認められなかった。

文章の男らしさを除いては、文章の感性的な評価においても、また、文章にみられる計量的な特徴や、構文や語彙の構造などの複雑な特徴と、読み手の印象は、密接に関わっていることが指摘できる。

3.7 文章の規模的な評価—文章の長さ と 詳しさ

文章の規模的な評価についても、文章にみられる客観的、あるいは、計量的な特徴と、読み手の印象には関連が指摘し得る。ここで、計量的に計った文の長さは、文頭から句点までの文字の数の平均を示したものである。個々の順位には、ある程度の異同があるが、主観的結果と客観的結果とは、

ほぼ一致している、と考えることができる。

実際の文章の長さの差が大きいのは、設問2の谷崎訳と田辺訳の比較であるが、読み手の印象では、設問3の島津訳とおの訳において最も差がみられ、次に、設問1の田辺訳と宮田訳の順になっている。これらから、計量的に短い文に比べて、それよりも長い文を読んだ場合には、一様に、長い、という印象を受けるが、長いと感じる要素は、単に、カウントできる文字の数の多少によるものではない、ということが考えられる。つまり、文の長さは、字数のような単純な長さよりも、むしろ、複雑な他の要因によって、印象づけられるのではないか、と考えられるのである。なお、今回の調査によれば、長いと感じられた文章は、いずれも、その執筆年代が古く、このことと関連があるのではないか、と思われる。

文章の詳しさについては、まず、その量に反応している、ということがいえる。いずれも、文章の量が多い文章の方を詳しい、と感じている。実際に、分量の多い文章の方が、様々な語が補われており、読者は、それに対して、質的に反応した、とみることもできる。

4. 調査のまとめと今後の課題

以上、個別にみてきたが、本調査では、幾つか、定義づけの難しい概念の項目が含まれていたことや、妥当な調査方法を用い得たか、という反省点も残されてはいる。しかし、およそ、次のようなことが、いえるのではないか、と思う。

- ① 文章表現に関する客観的、計量的な特徴と、読者の主観的な印象の間には、相関関係がみられる。

読者の独自の感性に基づいた主観的な印象は、作品に客観的にみ

られる個別の特徴に対して、反応した結果であり、それは、かなり、普遍的、安定的なものであるということが考えられる。

② わかりやすい文章の特徴。

一般に、センテンスが長くなればなるほど、文章は難しくなる、と考えられている。また、文章を難しくする要因として、堀川(1954)は、「センテンスの長短」、「漢字の多少」、「構文の複雑単純」の3つを指摘し、文学的文章では、センテンスが短く、漢字が少なく、単純な構文による文章の方がわかりやすい、という結果を導き出している。

本調査で、わかりやすいと感じられた文章としては、田辺訳、おの訳、あるいは、舟橋訳、今泉訳、が導かれた。これらの文章には、共通して、短い、新しい、読みやすい、柔らかい、温かい、といった、いわばプラスのイメージを含んだ印象が感じられていることがわかる。これらのイメージを与えられる文章について、計量的に分析すると、1文が短い、漢字含有率が低い、漢語的な表現や、非現代的な表現が出現する割合が低い、などの客観的な特徴を見出すことができる。また、比較的新しい時代に書かれた作品(新仮名遣いや、新字体を採用している作品)や、構文的にも、いくらか工夫が施された文章が、わかりやすいという指示を得ていることがわかる。つまり、本調査は、文学的文章を対象として、分析を行なったが、ここでも、先行研究とほぼ同様の結果が導かれたといえる。

③ 上手な文章が、必ずしも、わかりやすいとはいえない。

例えば、おの訳の文章は、わかりやすいという評価が、かなり高い割合で与えられているのに対し、上手なという評価は低い。これは、おの訳は、文章のほとんどが仮名で表記されているため、文章

が上手である、というイメージとは結びつかなかったのではないかと推測することができる。

④ 名詞の割合の多い文章の方が、わかりやすい。

本調査では、読者がわかりやすいと感じた文章の方が、他方の文章に比べて、いずれも、名詞の割合が多い、ということがわかった。もちろん、計量的に捉えることのできる文章表現の特徴は、文章表現の一つの側面を捉えたものにすぎないが、ここで現われた結果は、非常に興味深い結果である、といえる。

樺島 (1954) によれば、凝縮度の高い文章ほど、名詞の比率は高くなるという。言い換えれば、名詞の比率は、限られた文字数のなかでまとまったことを述べようとする文章ほど高くなる、というのである。名詞の比率が高い文章としては、一般に、新聞の見出し、新聞記事、パンフレット、広告の文章などが考えられる。

新聞の見出しや、新聞記事のような、いわゆる、報道の文章は、短い時間に、より多くの情報を不特定多数の読者に対して正確に伝達することを主眼とした文章である、と考えることができる。また、広告の文章などは、広告主が伝達しようとする情報が、消費者に伝わりやすいように工夫された文章である、と考えることができる。つまり、文の凝縮度が高いゆえに、名詞の比率が高くなった文章は、読まれる読者を想定し、読者が理解しやすいように、あるいは、書き手の主張や意図が伝わりやすいように、という配慮が加えられた文章である、とみることができる。

いわゆる報道の文章や広告の文章などは、事実的な文章であって、文学性の低い文章であると考えられている。そのような、文学性の低い文章の場合、名詞の比率は、文章のわかりやすさの一因となっ

ている、とみることができるが、本調査で用いたような文学性の高い文章についても、名詞の比率が高い文章の方がわかりやすい、ということが指摘できる。つまり、文章のわかりやすさを決める要因としては、従来いわれてきたような、センテンスの長短、漢字の多少、構文の複雑単純、あるいは、使用語彙の難易などのほかに、名詞の使用率を指摘することができるのである。また、本調査では、名詞の使用率の高さのほかに、漢語よりも和語の使用が多く、文章が書かれた時代が新しい、などの傾向がみられる文章の方がわかりやすい、ということがわかった。

安本（1958）は、文章の読みやすさを増すための方法として、

- ① 読者に焦点を合わせよ。
- ② 文章を短くせよ。
- ③ シンプルな語を見つけよ。

の3点を指摘している。本調査で用いた文章の中では、田辺訳、舟橋訳の文章が、これらの法則に則っていると考えられる。そして、ほとんどの読み手が、これらの訳文を読みやすいと感じている。つまり、書き手による読み手への配慮が、明らかに、読み手にも通じている、とみることができるのである。このことから、書き手と読み手の間には、何らかの共通の意識が働いているのではないかと考えることができるのである。

ところで、古田（1982）によれば、「語の感じ方」については、男女の間に、幾らかの差異がみられる、という。しかし、現段階の調査では、男女による印象の差異はわずか1項目しか現われなかった。その1項目は〈文章の男らしさ〉であり、古田氏が指摘する「性的立場が深く関わる場面」であると考えられ、文章の場合でも、語の感じ方と同じように、男女の反応に質的な差が現われる、とみることができる。

本調査では、学校での成績によって3グループに分け、それぞれ有意差検定を行なったが、そこに差はみられなかった。これは、都立高校の入学試験制度を反映したものと考えられる。いわゆる、グループ選抜方式は、学力を輪切りにして分類していく方法であるから、ほぼ同質の学生が1校に集中してしまったことを示すものと思われる。そのため、男女による違いも明確には現われなかったのではないかと考えられる。そこで、今後は調査の対象を質的に広げて、学歴や世代の異なる対象について、実験してみることが必要であると思われる。それらを、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 波多野完治『ことばと文章の心理学』新潮社 1958
蓮見陽子「同一情報に基づく文章表現の異同についての分析」『計量国語学 13-3』1991
林 四郎「文章表現と理解」『国立国語研究所論集 1「ことばの研究」』1959
堀川直義「分かりやすさの分析」『言葉の心理』宮城音彌編 河出書房 1954
樺島忠夫「現代文における品詞の比率とその増減の要因について」『国語学 18』1954
安本美典「読みやすい文章とは」『解釈 4-1』1958
古田 啓「男女の語の感じ方の違いと SD 法」『計量国語学 13-6』1982

[資料]

文章表現に関するアンケート

年 組 番 性別 氏名

これは、文章を読んで感じる印象についてのアンケートです。人によって感じ方には違いがありますから、自分が感じた通りに記入して下さい。
AとBの二つずつの文章があります。二つの文章を比べて、それぞれから受ける感じについて答えて下さい。下の各項目ごとに、Aが当てはまる時はA、Bが当てはまる時はB、と()の中に、記入して下さい。AもBも同じように当てはまると思う時はC、どちらも当てはまらない時はD、判断がつかない時はE、と記入して下さい。

<1-A>

源氏の君が須磨へ流されていったことをはるかに聞いて、空蟬は人知れずいたましく悲しく思っていた。しかしその想いを源氏に伝えるよすがもなく、筑波山を吹く風にたよりをことづけたいと思っても、それも今さら、人妻の身で——と憚られ、まったく消息も絶えた日を重ねたのだった。

<1-B>

女は源氏君が須磨に謫居して居られる事をも常陸から遙かに聞いて、人知れず思ひやり申しあげぬでもなかつたけれども、その意中をお傳へ申しあげる便宜さへないので、なるほど筑波山を越えて京に行き交ふ人も稀にはあるのだが、それに託するのも不安な気がして、聊かの人傳の消息さへなくて久しい年月が過ぎてしまった。

<設問>

- 長いと感じる文章は、 ()
古風な感じがする文章は、 ()
上品だと感じる文章は、 ()
読みにくいとを感じる文章は、 ()
わかりやすい文章は、 ()
固いと感じる文章は、 ()
温かいと感じる文章は、 ()
上手な文章だと思うのは、 ()
詳しい文章だと思うのは、 ()
男らしい文章だと思うのは、 ()

<2-A>

京から出向いて来た紀伊守など云ふ
俣たちや、その外迎への人々が、殿が
御参詣にお越しになる由を告げたので、
では道中が騒がしいであらうと、夜の
明け方から急いだのであつたが、數多
の女車をつづけて、仰々しく練つて來
るので、直きに日が高く上つて来て、
打出の濱を通る頃には、もう栗田山を
お越えになつたと觸れながら、前驅の
人々が路を塞いで入り込んで來る有様
に、皆々關山で乗物を下りて、此處彼
處の杉の下蔭に車を引き入れ、牛を外
し轅をおろして、木がくれに畏りつゝ
お通りをお拜み申し上げる。

<2-B>

京からは常陸の介の子で、紀伊の守な
どといった者たちが、迎へに来ていた
が、

「源氏の君が今日、石山寺にお詣りに
來られるそうですよ。偶然ぶつかって
しまつて」

と知らせたので一行は混雑を恐れてま
だ明け方に宿所を出た。

かなり急いだつもりだが、一行は女車
が多く、道いっぱいになってわらわら
と進むので思いのほか手間取つて、日
が高くなつてしまつた。

打出の浜へ來かかつた頃、

「殿は栗田山を越えられた」

ということで、源氏の前驅の者が道も
いっぱい立てこんでたいへんなさわ
ぎである。

これでは通るわけにいかない。

常陸の介の一行は逢坂の關山で皆おり
て、源氏の行列に道を譲り、やり過ご
すことにした。ここかしこの杉の下に、
牛を外した車を据え、木隠れに畏まつ
て待つのであつた。

<設問省略>

<3-A>

かうしてゐる中に女の夫の常陸介は老
衰の極であらうか、絶えず病みつづけ
て、心細く感じたので、子息達に唯こ
の女君の事だけを言ひ残して、「萬事
は唯この君の御心通りにして、自分の
在生中に變らずお仕へせよ」とばかり
始終口ぐせに言つて居た。女君は、薄
倅な前世からの因縁によつて、この夫

<3-B>

こうしているうち ひたちのすけは
病氣がちで 心細かつたので、子ども
に 妻のことをくれぐれも 言ひお
きます。

「すべて あの人の お心にまかせて、
變らずに 仕えなさい。」

と、明けくれ 言っていました。女も、
じぶんは つらい宿世で、この上 こ

にまで先立たれ、更にこの先何んな風に落ちぶれさまよふのであらうかと、思ひ歎いてをられる、その様子を見るにつけて、常陸介は、壽命といふものがあることだから、惜しみ留めようにも方法がない。が、何うかしてこの女の御ために魂魄をこの世に遺して置く事が出来ればよいに。我が子達の了簡もよく分らない事だからと、気がかりでもあり悲しくもある事と言ひもし思ひもして居たが、壽命は思ふ儘には引き留める事の出来ぬもので、遂に亡くなつてしまった。

<設問省略>

<4-A>

以前、伊豫介といった老人のことを、読者は、まだ記憶にとどめておられるだろうか。

あれはいつだったろう……そう、たしか桐壺院がお崩れになった、翌年のことだったと思うが、任代わりして常陸介となった彼は、はるばる赴任していったのであの帯木、——目に見えて、ふと消えゆくにも似た女——その名を空蟬と呼んだ人も、夫にしたがって、常陸へ下っていったのだった。

<設問省略>

の夫にまで死なれたら、どうして生きていけようかと、嘆いています。男は、そうした女の姿を見て、人の命は限りのあるもので 惜しんでもとめようがない、なんとかこの人のために せめて 残しておく 魂でもあればなあ、子どもの心もわからないのに、と、心配で 悲しくも思うのですが、心で とめるわけにもいかず なくなりました。

<4-B>

あの伊予の介といった男は、桐壺の院がお隠れになつた翌年、常陸の介になつて任国に下つたので、その空蟬も連れて行かれたのだつた。

The Difference of the Impression and Evaluation of an
Expression on the Same Information.

Youko Hasumi

The impression of a sentence is in the common with many readers. I think that it is based on a characteristic of sentence structure. Then I made two sentences of the same information read to high school students and investigated the impression. As a result, I conclude that an impression of a sentence is a close relation with a characteristic of sentence structure.

Key words

① impression of a book; ② mathematical linguistics; ③ the same information; ④ impression evaluation; ⑤ translation of classic literature

(学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程, 日本語学専攻)